

妖

圓地文子

妖

ふ
み
こ

著者略歴

明治 38 年東京に生る。日本女子大附屬高女中退。
故小山内薫に師事し戯曲「曉春縣夜」その他を發表。
後小説に手を初め「ひもじい月日」で女流文學賞を受く。(昭 29) 作品集「女の冬」「女坂」
etc. 現住所 台東區谷中清水町 17

昭和三十三年九月二十日 初版
昭和三十三年一月三十一日 七版

定價 二八〇圓

著者 圓え 地々 文々 子々

發行者 車 谷 弘

印刷者 曾 根 盛 事

發行所 文藝春秋新社

東京都中央區銀座西八ノ四
振替口座東京七八七四三番

萬一落丁亂丁の節はお買求めの書店
又は發行所にてお取り換え致します

本文印刷 扶桑印刷
函その他 大日本印刷
製本 福神

目次

妖

五

家のいのち

三九

くろい神

六九

虚空の赤んぼ

一〇三

男のほね

一三一

殺す

一四九

耳璫珞

一七七

妾腹

二〇七

水草色の壁

二三五

二世の縁 拾遺

二六一

短
編
集

妖

妖

その静かな坂は裾の方で振袖の丸みのやうに鷹揚なカーブをみせ、右手に樹木の多い高土手を抱へたまま、緩やかな勾配で高臺の方へ延び上つてゐた。片側には板塀やコンクリート塀がつづいてゐたが、塀の裏側は更に急な斜面に雪崩れ込んで崖下の家々は二階の縁がやうやく坂の面と並行する低さだつた。言はば坂は都心にしては廣い丘陵地帯の一邊を縁どつて低地の人家との間に境界をなしてゐる形である。遠い昔には恐らく臺地の一斜面に過ぎなかつたのが、いつか中腹に帯のやうにひろがつた道が人や馬の踏み固めるままに自然の切通しになつたものであらうか。

高土手の裾を一間餘り疊み上げてゐる煉瓦の土止めは、明治の初めにこの丘陵地を占領してゐた大寺院群が崩壊し、公園といふ西洋風な名で呼ばれるやうになつた當時に築かれたものら

しく、小豆色に濕氣の滲んだ長方形のつなぎの面には青さびた苔が群ら立ち、ところどころに蔓草が這ひまつはつてゐた。その上は壞え落ちさうな赤土の土手で露はに節くれ立つた大樗の根や、細葉丸葉とりどりに名も知らぬ灌木の群れが案外がつちりと斜面を守つて、鬱蒼と生ひ茂つてゐる。

千賀子は子供のころこの近くに住んでゐたので坂とは幼馴染みであつたが、戦災のあと、偶然窪地の古い家を買つて住みつき、もう十年この坂の底に沈み込んで暮らした。それでも家の門は坂と反對の側についてゐるので、坂には背を見せて暮らしてゐるやうなもので、高土手の上の二抱へもある大樗が窪地の狭い庭からはふり仰いでも梢は見えないながら、秋になると雨のやうに枯葉を降らせ、掃いても掃いても吹溜る際限のなさを迷惑がる程度であつた。この坂と千賀子がめつきり親しくなつたのは、一年ほど前坂に面した崖地を地形して、そこに部屋を建増してからのことである。その時坂に向けた塀に出口を切開けたが、それまでは低地の町に向いた横町の門がこの家の唯一の出入口であつた。

千賀子の夫の神崎啓作が、終戦後半年目に勤めさきの外地から生命辛々引揚げて來たのもこの門だつたし、その頃少女だつた二人の娘がいつか成長して一人は九州へ、一人はアメリカへそれぞれ夫と一緒に去つて行つたのも矢張りこの門からであつた。姉より先きに結婚した次女はともあれ、長女の桐子は結婚しても一緒に住むつもりでそんなことも計算に入れて、千賀子

は自分の部屋を増増したのであつたが、その普請のやつと出来上つたところには、桐子は結婚相手の醫師がカリフォルニアの私立病院へ赴任するのと一緒に、慌しくこの家を去つて行つてしまつた。

邪推すれば父と母の溶け合はない雰圍氣を、否應なしに呼吸して暮らさなければならぬこの家のうつたうしさに、娘たちはさつさと見切りをつけてひろい空へ飛去つて行つたのかも知れない。

「桐子はもう日本へ歸らないやうな氣がするわ」

横濱から貨物船で發つて行く娘夫婦を送つた歸りの電車で、千賀子はふと隣の啓作にささやいて、そのあと長い間夫に向けてゐた氣構へがどこか一角ぐらりと崩れるのを感じた。少し耳の遠い啓作は走音の間で千賀子の言葉を聞きとりにくかつたらしく、それでも妻の珍らしく馴な寄る氣分だけは感じて、鉛色の頭を傾けて來た。

「そんなことはない……四年やそこらすぐたつてしまふ」

千賀子の言葉をのみ込むと、啓作は強く首を振り膝の間に挿んだ黒い雨傘の上に兩手を置いて突き直した。啓作の答へたのは先方の病院の契約期間で、千賀子の考へてゐる心の空間とは違つてゐた。啓作と千賀子が話せば、必ずこの程度の食ひ違ひは一つ一つの會話から生れるのである。啓作は平氣だつたが、千賀子はさういふ理解のずれを語學に通じない外國人同士の對

話のやうに焦れつたがり、隅々までテンポのあつた會話にしようとあせるので、實際には行きちがひは一層烈しくなつた。今日はしかし千賀子の方にそれほど根がなかつた。夫に對していつも荒らくれた妻であつた自分を見て育つた桐子にも、新しい夫との離れた土地の生活の中で、濃やかなもの、濕つたもの、ささやかなものの美しさを育てる心が缺けてゐはしまいかと不安なのである。

「私はこれから三越へ寄る……あんたは來ないかな」

東京驛に近くなると、啓作はそれまで開いてゐた週刊雜誌を老眼鏡と一緒にポケットにしまつて腰を浮かせた。

「三越？」

「中國の陶器の名品展だ。明日が初日ぢやないか」

啓作は千賀子のけげんさうな顔を咎めるやうにいつた。答へを忘れた生徒の思出すのを待つ教師のやうに千賀子を見てゐる。

「ああ、あなたも出品していらつしやるのね」

「吳州赤繪の瑞瓢形花瓶……いつか進駐軍のアーノルドの欲しがつた奴だ。いい場所に並べることになつてゐるんだが、店のもの委せにすると何をするか解らんから、今日の中一度眼を通して來る。どうだ。一緒に來ないかね」

「いいえ、たくさん」

にべもなく首を振つて千賀子は横を向いた。

啓作の自慢の吳州赤繪の花瓶には厭な思ひ出がからんでゐた。夫婦だけの祕密でもあつたが、同時にそのことが前から言葉の通じ合はなかつた啓作から、一層はつきり千賀子を引き離した。父母のさういふ祕密を桐子も九州にゐる妹の品子もまるで知らないと思ふと、自分の裡でだけ處理されたその祕密が千賀子に新たな感傷を強ひた。

殖民地の金融を扱ふ銀行にゐて、啓作は中國や東南アジアの國々を二十年近くまはつてゐた。千賀子も初めの十年ほどは一緒だつたが、あとは子供達の教育を名目にして東京を動かなくなつた。千賀子が英語の勉強などあらためてするやうになつたのはそのころからである。

啓作は勝負事も酒煙草も嫌ひだつたが、骨董には若い時から趣味があつた。貧しい家に育つて大學も檢定をとつてから入つたのだが、學生時代家庭教師をしてゐた家が美術商で、古いものを見る機會に恵まれたのと、不思議に勘^{かん}がよく、擬^{まが}ひと眞物と交^まぜて並べてであると必ず見分けた。

「神崎さん、あんたは十年みつちりこの道で苦勞すれば一流の骨董屋になれますぜ。勤め人になるより退屈しない商賣だがなあ……」

そこの主人に折紙を附けられたのが啓作には嬉しかったらしく、「なに片手間だつて出來な

「いいことはない」と元來獨學は得手であるから、その家にゐる間に主人や番頭を師匠にして充分眼を肥やした。中國にゐた頃も、つましく暮らしを切りつめて勤め先きの附合ひには不義理もしたが、月収の大部分は書畫や陶器の蒐集に當ててゐた。千賀子との折合ひの悪さにも、啓作が家内の經濟を細かくいふ癖に、骨董集めには家族の生活を無視して金を費ふことも混つてゐたのである。しかし終戦後、銀行がつぶれて手當ても碌に出ず、貨幣價值は狂つて動きのとれない時代には、早く内地に送りかへしてあつたこれらの蒐集品が神崎一家の饑渴を救ふ有力な資源になつた。

續々入り込んで來るアメリカ人を相手に啓作はもぐりの骨董商になつた。スーヴニールの扇や人形で満足しない凝つたものの好きの似え而非せ通人をねらつて儲けたがつてゐるイタリー人のブローカーが間にあて、いろいろなアメリカ人を家へ連れて來た。

千賀子にも相手に出てくれといふ。何ぶん預金封鎖で現金の動かない時のことで背に腹は替へられない。停電の多い真くらな部屋に蠟燭を點し、牛肉のすき焼きなど饗應して千賀子も客をもてなしたが、美しくもあり、外地暮しに馴れて英語の會話も上手なのに、物を賣りつける目的がこつちにあると思ふと、愛嬌を賣る氣になれなくて「笑はない奥さんだ」とからかはれた。

千賀子に不快だつたのは物を賣るといふことだけではなく、啓作が祕藏の眞物を賣るのを惜

しんで、目の利くままに只のやうな安値で買集めてあつた贋作の書畫や陶器を、ドミノと口を合せて、通人ぶつた相手にうまく高値で賣りつけることなのである。

「あなたのすること詐欺ぢやないの」

輕蔑を露骨に見せて千賀子は度々啓作を詰つたが、實際にはその金がなければ娘達を學校へやつてゐる日々の暮らしは立ち兼ねるのだつた。ある時、贋物を賣りつけたことが問題になつて危くMPに踏み込まれさうになつた。それをどうにか揉み消すと、今度はアーノルドといふ佐官級の軍人から、啓作の祕藏してゐる例の吳州赤繪の瓢箪形の花瓶を所望して來た。勿論相應の値段で買取りたいといふのだが、コバルトと紅の色鮮かなこの瓢箪形の花瓶に深い執着を持つてゐる啓作は何としても手放したくないのである。恰度その時は次女の品子が肺門淋巴腺炎で高價藥の注射を必要とする時でもあつた。

千賀子は花瓶を欲しいといふ相手はMPをなだめてくれたアーノルド大佐だつたし、賣ればかたがた品子の療養費にも當分息がつけるので、さう決心することを幾度も啓作に奨めたが、たださへしつくりしない二人の間で啓作の嗜まないことを無理にさせようとすれば、感情は一層荒ら立つばかりだつた。千賀子が無斷で持ち出しでもせぬかと疑つて、啓作は花瓶をある銀行の倉庫へ預けにいつた。

そんなごたごたの中へ、ある日ふいとドミノがやつてきた。

「奥さんレディすぎる。お客さんの取り持ち下手、旦那さん機嫌わるい、それ私お氣の毒に思ひます。替りにしていただきたい仕事ある。お金澤山澤山とれます」

ドミノは赤い鷺鼻の根を皺めて啓作と千賀子の顔を見較べ、狡さうに笑つた。啓作はむつとして黙つてゐた。

ドミノが千賀子に與へようとしてゐる仕事は春本の英譯であつた。名前は絶対に知れないやうにする。アメリカでは日本人が結婚してどういふ風な性生活をはじめるかに興味を持つてゐる讀者が多い。その要求に應へるには時代のずれた笑ひ本や笑ひ繪では駄目なので、現代の結婚のありのままを書く筆者と畫家は既に揃つてゐる。千賀子は與へられた日本文を解り易く英譯すればよいといふのである。啓作はドミノにだけ喋らせて黙つてゐたが、黙つてゐることで暗に同意を表明してゐた。

千賀子は賣物を高く賣つて平氣でゐる啓作も厭だつたが、それよりもつと複雑な不快さでさういふ仕事を妻にさせようとしてゐる啓作を憎んだ。賣春を強ひてゐるわけでもなしと啓作は恬としてゐるらしいが、啓作の何でもないと思つてゐることが千賀子にはやりきれなかつた。ドミノの好色な眼色にはどうやらこの祕密出版を通して、神崎夫婦に一種のサヂズムを強ひてゐる感じも受取れるのである。

しかし千賀子は結局その仕事を引受けた。啓作の惜しんでゐる赤繪の花瓶を品子の病氣のた